琉球大学学術リポジトリ

田芋栽培の地域的展開　５．金武町の田芋栽培

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): 田芋, 金武, 産地, 伝統的作物, 栽培技術, 背景, 連作障害, 芋腐敗, 病害虫防除, 冷凍貯蔵 キーワード (En): 作成者: 外間, 数男, Hokama, Kazuo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015681

田芋栽培の地域的展開

5．金武町の田芋栽培

外 間 数 男

（元沖縄県農業研究センター名護支所）

Kazuo HOKAMA: Regional development of taro cultivation in the paddy field.
5. Taro cultivation in Kin Town in Okinawa Prefecture.

はじめに

金武町の前身・金武間切は，現在の金武及び宜野座全域と名護及び恩納の一部を含む広大な領域であった．1673年に名護及び恩納の一部が切り離され，金武と宜野座に収まる．金武間切は1908年（明治41）に村となり，1946年には宜野座村が分離し，1980年の町政施行で金武町が誕生した（金武町誌，1983）．

金武町は金武，並里，中川，伊芸，屋嘉の5区からなる．金武と並里は字金武として境界も入り組むほど密着し，町内最大の集落を形成している．両区は石灰岩丘陵地に位置し，湧水に恵まれ，豊富な湧水を利用した水田が武田原や福花原に広がり，古くから水田農耕が行われていた．また武田原は両者の地割地であり，隣接する羽佐間原では天皇家の献納米が作られるほどの水稲地帯であった（金武区誌，1994）．現在，並里区は町内田芋のほとんどを産し，主産地を形成している．

中川区は国頭マージの丘陵地に集落があり，億首川東北域に水田地帯を形成し，水稲と田芋を輪作している．伊芸，屋嘉両区は河川域にある沖積地で水稲が作られているが，伊芸では自給的に，また屋嘉では自給及び販売を目的として栽培されている．最近両地域では田芋栽培が増える傾向にあり，屋嘉では急増している．

金武町で田芋が注目され始めたのは1959年頃である．当時水田は稲を中心とし，田芋は畦沿いに植えられる程度であった（金武区誌，1994）．米軍基地からの廃物汚染は水稲に壊滅的な被害を与えたが，田芋はほとんど影響がなかったことから，田芋栽培を本格的に行う契機になったという（金武町，1994 a）．また1970年頃にはコザ市場（沖縄市）に田芋を出荷したところ好評であり，生産拡大の後押しになった．1976年の栽培面積は，武田原のみの5 haであったが，1977年に福花原の土地改良が終わったことで，1978年には16.7haに拡大した（金武町誌，1983）．

しかし田芋栽培が本格化するなかで，芋腐敗など連作障害は顕在化し，生産拡大に大きな陰りをおとした（金武町誌，1983）．当初芋腐敗原因が不明であり，耕作放棄をせざるをえなかったが，1987年に水稲輪作による芋腐敗防止が成功したことで，栽培は再び軌道に乗ることとなった．その後連作障害はほとんど問題にならず，また輪作体系の定着で水稲の作付面積や収穫量も安定してきた（沖縄総合事務局，1991，沖縄タイムス，1987，1988）．

現在金武，並里，中川は田芋と水稲の輪作地帯であり（写真1，2），伊芸，屋嘉は水稲を主体に田芋が散在し，水稲との輪作が行われてい

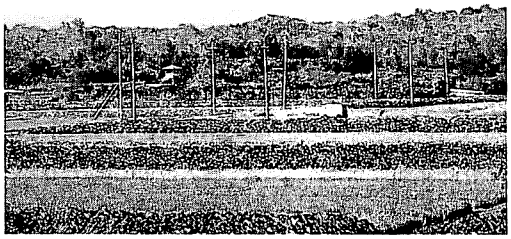

写真1．水稲と田芋が交互に混在（並里）．

写真2．水稲と田芋の輪作圃場（並里）．

る．金武・並里の耕作地・武田原や慶武田原は湧水を利用した水田地帯であったが，現在湧水は利用されていない．また億首川流域の福花原や頭呂地原，伊芸，屋嘉の水田も河川や農業用ダムからの灌漑水が用いられている．

金武町は水田の基盤整備がほとんど終了し，田の一筆面積は大きく，灌漑施設（写真3）や農道も整い，農業生産を行う上で充分な整備がなされた地域である．古くは湧水が水田を支え，現在ダムからの導水が田を潤し，水稲と田芋の輪作システムの導入で安定した水田経営がおこなわれている．金武町の田芋栽培については，概略的な記述があるのみで（蝦名，1993，橋本，2002，並里区誌，1998），栽培の技術構造や生産の歴史的展開については明らかでない．今回，金武町における田芋栽培の現状を調べ，自然環境や歴史，文化など社会的条件との関連で検討し，基盤整備された近代的農業地域における田芋栽培の存立条件を明らかにした．なお調査は1999年から2006年にかけて継続的に行った．調査に当たっては金武町役場や金武町特産品物産センター外間友一氏，JAおきなわ北部地区営農センター新里一史氏，屋嘉公民館，生産農家に協力を頂いたので感謝の意を表す．

写真3．灌漑用取水口．

1．自然および社会的条件

1）地　勢

金武町は，恩納村との境界をなす石川岳（204m）や恩納岳（362m），ジャフン岳（250m）など東西に連なるの脊梁山地の南東側に位置する（図1）．山の稜線から海岸に向かっては台地状をなし海岸線に迫り，海岸や河川沿いには狭隘な沖積地を形成する．町域の80％以上は丘陵地や段丘からなり，低平な台地の卓越する地域である（並里区誌，1998）．地形・地質的には海岸や河川沿いの沖積地と石灰岩台地，国頭礫層地帯に分けられる．

沖積地は町域の15％弱を占め，グライ土壌や褐色低地土からなり，水田地帯が形成され，また良質のサトウキビ畑にもなっている．石灰岩台地はアルカリ性土壌の島尻マージからなり町域の17％を占めるが，68％以上は赤色や黄色の

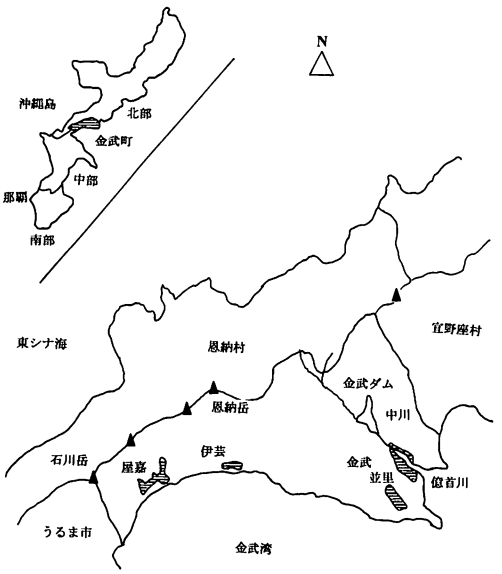

図１．金武町における田芋の調査地点.

酸性を呈する国頭マージ土壌である（沖縄総合事務局，1991）．2006年に田畑の土壌pHを調査したところ，田の大部分がpH5.5以下であり，畑もpH５以下の強酸性土壌であった（表１）．田芋は土壌の適応性が広く，pHは5.6～７を最適としているが，強酸性土壌では酸度矯正も必要となる．

表１．金武町の田芋田の土壌pH.

	土壌pH					
	4.0～4.5	4.6～5.0	5.1～5.5	5.6～6.0	6.1～6.5	6.5～7.0
田芋田	2	3	4	1	1	1
畑　地	3	1	－	－		－

集落は水利の便利な沖積地や石灰岩台地に位置する．特に石灰岩地域の湧水地は古くから集落密度が高く，湧水を利用した農業が安定的に営まれ，規模の大きい集落が形成されている（田里，1992）．

脊梁山地から海岸線までは狭く急峻であることから，河川は短いが，河口域には沖積地が形成され，良質な農耕地帯となっている．町内最大は億首川であり，喜瀬武原を源として全長2.5kmであるが，河口域には広大な水田地帯が形成されている．また伊芸の美徳川，屋嘉の渡久比那川は短く，河口域には沖積地が形成され水田地帯となっている．各河川の源流は米軍基地内にあり，森林地帯から安定的に供給されている．

２）社会的条件

金武町の人口は10,454人（2004年）である．1970年の9,953人に比べ約５％の増加となり，北部地域では人口増加率の最も高い地域である．人口密度は281.5人/km^{2}であるが，米軍基地を除いた地域密度は813人となり，北部地域では最も過密な地域となっている（金武町誌，1983）．

2000年度の就業者数は3,730人（36.9％）ある．そのうち第１次産業は492人（13.2％）であり，そのほとんどが農業従事者である（443人）．第２次産業は788人（21.2％），第３次産業は2,450人（65.7％）となり，サービス産業など第３次産業が突出する．

農家数は411戸（2005年）であるが，自給的農家が30.2％（124戸）を占め，兼業農家は39.2％（161戸），専業は30.7％（126戸）となっている．また販売農家（287戸）のうちで，耕地面積0.5ha以下の農家数は40.8％（117戸）に達し，0.5～１haの37.9％（109戸）と合わせ，１ha未満の農家が80％近くを占めている．また１～３haが19.5％（56戸）となり，３ha以上は1.7％（５戸）にすぎない（沖縄総合事務局，2006）．

２．土地利用と農業生産

金武町の総面積は37.75km^{2}であるが，大部

分を米軍用地（68%）で占められ，耕地率は10.03%にすぎない．沖縄県の耕地率は15%であることから，耕地の少ない地域である．耕地面積は296ha（2005）であり，田が59ha，普通畑201ha，樹園地29haとなっている（表2）．

耕地面積は1964年の408haに比べ30%近く減少し，田も半分近くになっている．しかし田は1985年以降から増加傾向を示し，変動が少なく安定してきた．

金武町の農業粗生産額は17.1億円（2004）である．生産額の27.5%（4.7億円）は養豚で占める．主要農産物の生産額では（表3），切り葉が最も多く18.1%（3.1億円）を占め，次いで田芋の10.5%（1.8億円），生乳8.8%（1.5億円），キク6.4%（1.1億円）となっている．農業生産額のなかでは田芋が上位を占め，金武町の重要品目となっている（沖縄総合事務局，2006）．

表2．金武町における耕地の利用状況[1]．

ha

年　度	耕地面積	田	普通畑	樹　園	牧草地
1964	408	113	293	2	28
1975	201	31	145	25	−
1985	342	39	255	30	18
1995	378	63	249	47	19
2000	346	57	248	30	11
2005	296	59	201	29	7

1）内閣府沖縄総合事務局農林水産部「第1次～第34次沖縄農林水産統計年報」

表3．金武町における主要農産物の面積[1]と生産額[2]．

ha・百万円

種　類	面　積	生産額
切り葉	28	310
水いも	22	180
きく	12	110
水稲	68	50
サトウキビ	54	50
マンゴー	1	40
リアトリス	3	30
合　計	188	770

1）内閣府沖縄総合事務局農林水産部統計調査課「平成16年度園芸・工芸農作物市町村別統計書」
2）内閣府沖縄総合事務局農林水産部「第34次沖縄農林水産統計年報」

3．田芋の栽培地

田芋の栽培地は，億首川流域の福花原やするじ原，ウッカガー（金武大川）など湧泉の下流域に広がる沖積地の武田原であり，屋嘉の渡久比那川流域や山間地の谷田である．福花原，武田原は行政区としては並里区にはいる．いずれもかっては湿田地帯であり，排水不良で浸水に悩まされていた．しかし排水対策や耕地整理，河川改修により不良田は美田に変わり，干ばつに左右されない安定した生産基盤を築くことになった（金武町誌，1983）．

田芋は，金武町では戦前から自家用としてわずかに栽培されていたが，1970年頃からコザ市場への出荷を契機に急速に増加していった．市場での評価も好評であり，価格も高く，サトウキビより収益性の高いことから栽培は過熱していった．1976年までは武田原の5haだけであったが，1977年に福花原の土地改良が終了したことで10haに増加し，1978年には17haになり，水稲に代わって田芋の一大産地に変貌した（金武町誌 1983）．

しかし1979頃年から芋腐敗が発生し，壊滅的な被害を被ることになり，田は耕作放棄に追い込まれる事態が生じた（金武町誌，1983）．農業改良普及所や町役場，水芋組合の数年間の取り組みが功を奏し，1987年には水稲との輪作体系が確立され，芋腐敗をゼロに抑えることができた（沖縄タイムス，1987，1988）．現在，水稲と田芋の輪作により，県内最大の田芋産地になっている．

金武町の田芋生産量は330 t である（表４）．その71.2％は並里区で生産され，次いで屋嘉区の20.4％となり，両区で町内の90％以上を生産する（表５）．しかし屋嘉区は1997年まで田芋栽培が全く行われておらず，水田のほとんどは水稲であった．５～６年前から田芋の利益性や商品性が注目され，栽培が増加してきた．また中川区の増加も著しく，水稲との輪作で両者の安定生産につながったことも大きな要因である．また伊芸区でもわずかに栽培されているが，最近増加の兆しがみえてきた．

表４．金武町における田芋の生産推移[1)]．

ha・t

年度	収穫面積	収穫量	kg/10a	出荷量
1979	18.0	306	1700	245
1980	14.2	192	1350	148
1981	12.7	185	1460	150
1982	14.0	210	1500	168
1983	14.6	216	1481	164
1984	15.0	222	1480	174
1985	18.0	280	1556	224
1986	19.0	280	1474	224
1987	16.0	256	1600	205
1988	19.0	281	1479	224
1989	18.0	272	1511	217
1990	18.0	276	1533	221
1991	14.0	215	1536	172
1992	14.0	217	1550	174
1993	14.0	208	1486	166
1994	14.0	200	1429	157
1995	27.0	405	1500	340
1996	21.0	335	1595	238
1997	21.0	376	1790	267
1998	22.0	407	1850	289
1999	22.0	410	1864	288
2000	22.0	400	1818	330
2001	23.0	400	1581	335
2002	22.0	319	1450	276
2003	22.0	345	1568	298
2004	22.0	330	1500	297

1）内閣府沖縄総合事務局農林水産部統計調査課：「昭和54年度～平成16年度園芸・工芸農作物市町村別統計書」

表５．金武町における田芋の地区別栽培面積[1)]

ha

地　区	1997年	2005年
中　川	0.02	0.72
並　里	16.74	12.92
金　武	0.60	0.77
伊　芸	0.04	0.03
屋　嘉	0	3.70
計	17.38	18.14

1）金武町役場産業振興課

４．田芋栽培の技術構造

１）品種と作型

2006年５月に品種の調査を行ったところ，調査した32筆全てが白茎系であった．赤茎系は小規模栽培のみであり，販売目的としての主力品種は白茎系である．

金武町の田芋は，水稲との輪作体系から冬植が多い．水稲は２月下旬から３月中旬に１期作の田植えが行われ，６月下旬から７月に収穫される．また２期作は８月田植え，11月収穫になることから，正月の需要期に合わせた作付け体系を容易に構築することができる．盆用は，８月収穫になることから，水稲との輪作が難しい．しかし１期作のみなら可能であるが，連作障害回避の点から少ない．連作障害による芋腐敗は夏期盛夏期に多いことから，発生前に収穫すれば可能かもしれない．しかし大きなリスクを伴うものであり，危険を冒してまで盆用を栽培する農家はいない．

２）耕起及び植付け

金武町域の田はほとんど基盤整備が終わり，一筆面積も大きい．一筆面積を調べたところ，300m^{2}以下が全体の5.7％，301～500m^{2}が40.0％，501～1,000m^{2}が51.4％，1,001m^{2}以上が2.9％であった．一筆の田はほぼ500m^{2}か又は

1,000m²で区切られている．これらの大規模田は一筆を細長く仕切り，大型機械の使用が容易である．田はほとんどがトラクタなど大型機械を用いて耕起がなされている．

耕起は一般的に落水後に行われ，湛水下で行うことは少ない．しかし降水量の多い時期には排水が追いつかず湛水下で行われる．耕起後の地ならしは湛水下で行う．

収穫時に植付け用苗が選定されることは宜野湾市大山と同じである．掘り取り後，芋と葉柄の境を切断し，切口の褐変腐敗を確認して良苗を選り分ける．苗には親芋，子芋が用いられていた．

田芋の植付間隔は田植綱を用いて定められる（写真4）．田の耕起・整地後に，田面上の縦方向に田植綱を引っ張り畦間・条間を決める．また横方向は勘を頼りに目測で株間を決め，ほぼ一定間隔に植えられる．また綱上に印を付ける場合もあった．

写真4．田植綱で挿苗位置を決定．

栽植距離は，畦間×株間とも30cmから50cmの間にあり，45×45cmが最も多く，全体の25％を占め，次いで45×35cmの18.8％であった．畦間40～45cmが全体の68.8％を占め，株間35～45cmが78.1％を占め，ほぼ県の栽植距離に近いものである（表6）．

表6．金武町における田芋の栽植距離別筆数．

		株間 cm				
		30	35	40	45	50
畦・条間 cm	30	1				
	35	2	1			
	40	2	1	2		
	45		6	3	8	
	50		1	3		2

しかし30×30cmの密植から50×50cmの疎植まであった．また畝間60cmと条間40cmの2条植もあった．

3）施肥

植付け前の基肥には鶏糞や牛糞を用いることが多い．特に鶏糞は調査したほとんどの農家で用いられ，施用量は一定でないが150kg～1,000kg／10aの範囲にあった．また牛糞を用いる農家は少ないが，600～900kg／10aの範囲に施用されていた．いずれも市販品の利用である．基肥として化学肥料は，芋肥料（9-9-18）やCDU（15-15-15）が用いられ，240～450kg／10aの範囲に施用されている．

また追肥は1～2回行われるが，全くしない農家もあった．肥料としてCDUや芋肥料が用いられ，植付け後2～3ヶ月後に施用されていた．

4）管理

金武町でも宜野湾市大山と同じように湛水・落水を交互に繰り返し，田地に空気の循環を図る栽培法が採られていた．田芋栽培にとって水管理は極めて重要であることに地域間差はない．

田芋田のほとんどは沖積地にあることから，地下浸透が少なく滞水しやすい．降雨後の冠水

や盛夏期の水温上昇は芋腐敗を起こしやすい．水が澱むと芋腐敗を起こしやすいことから，田への酸素供給は重要である．落水後は田面に親指が入るほどのひび割れをまって注水することもあった．

田の乾湿を交互に行うことは耕土への酸素補給を促進する点から重要である．そのことで芋腐敗を防ぐことになると思われる．芋腐敗は嫌気的な状況下で発生しやすい．新鮮な水の供給と田の乾湿を繰り返すことは，田の好気的状態を保つために重要である．

また落水し畑状態にすると雑草が繁茂しやすい．田の面積が大きく，手作業が難しいことから除草剤を用いることもあった．除草は植付け初期を重点的に行い，生育中期以降は田芋の繁茂で雑草も抑制され除草も不要であった．

5）病害虫防除

田芋は梅雨時期になると疫病が発生しやすい．特に生育最盛期に発生しやすいことから，芋肥大に影響を与えると思われる（外間，2006）．特に冬植は，生育最盛期の前半が梅雨時期に当たることから，その後の生育に大きな影響を及ぼすと推測される．

また連作に伴う芋腐敗は現在ほとんど問題になっていない．かっては収穫皆無になるほどの被害があったが，水稲との輪作体系の確立によりほとんど問題にならなくなった．

食葉性害虫としてハスモンヨトウやイッポンセスジスズメ，イナゴモドキなどが夏期の生育最盛期に多発し，葉身を短期間に食い荒らすなど大きな被害を与えていた．薬剤散布も行われていたが，多発後の対応になる例もみられ，的確な防除対策が必要であった．またタロイモウンカによる吸汁痕やアブラムシの発生も観察されたが，食葉性害虫との同時防除が行われ，単独で防除することはないという．

6）収穫調整

収穫は落水後または湛水下で掘り棒を用いて行われるが，全株を一斉に，また親芋のみを先に収穫し，子芋を後回しにする場合もあった（写真5）．収穫後は圃場内で調整を行い，芋の切断面から良品を判別し（写真6），水炊きされ市場に出荷される．水炊きは芋の成熟や品質判定に欠かせないものである．仲買業者は生芋を安価で求め，独自に水炊きするが，水炊き後の品質が生産者とのトラブルの要因になっている．

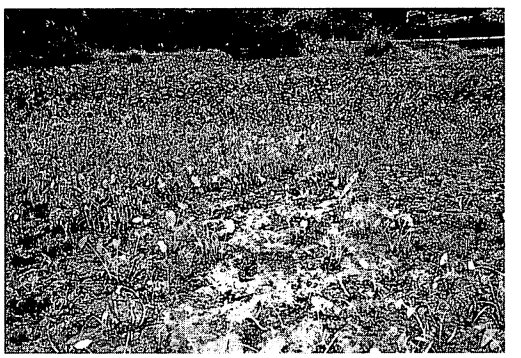

写真5．落水後の収穫（並里）．

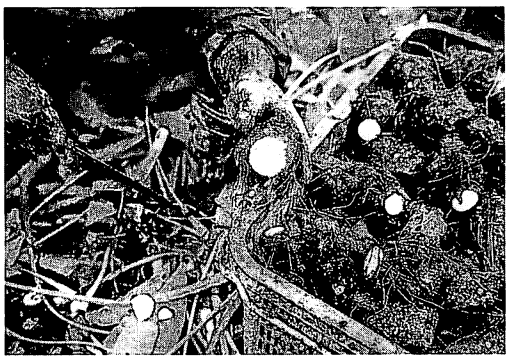

写真6．収穫調整時の芋切断面で良品判別．

水炊きされた田芋は市場で相対取引され，また仲買業者に個別に販売される．農協取扱いは

全出荷量の半分を占め，協同青果を経由して中央卸売市場でセリにかけられるが，一部は直接量販店に出荷することもある．最近市場に直接搬出し相対取引することも多くなり，また仲買業者や生産者による青田買いもみられる．販売形態は多様であるが，取引の交渉力を強化し，中間マージンの軽減や中間業者の寡占排除，ブランド化推進などを図るためには窓口の一元化が必要であるという（金武町，1994 b）．

5．田芋栽培の社会的背景

田芋は沖縄の盆・正月にとって不可欠な食材である．豚肉料理がメインデイシュであれば，田芋は食前料理や供え物としてなくてはならいものである．特に冬期の田芋は味が良く，入手も容易であることから，古くから正月料理に用いられてきた．

沖縄県における田芋の生産量は810トン（2004年）である．その約80％・642トンが出荷され，そのうちの45％・286トン（2004年）が県中央卸売市場で取扱されている．年間取扱量の約22％は12月の正月向けであり，12月から2月の取扱い量は年間取扱量の約45％に達する（表7）．また8月の盆用は年間取扱量の約11％にすぎないが，県産の占める割合は低く，60％以上がフィリピン産で賄われている．

金武町は水稲と田芋の輪作地帯である．輪作で安定的な生産を維持し，どちらが欠けても成り立たない不可分の関係にある．生産農家は水稲単独より田芋導入で収益性が増し，また田芋栽培のみでは自家米に事欠き，芋腐敗の悪夢が蘇ることも専作より輪作を最善の選択としたと思われる．島産米の評価は高いが，規模が狭小であり，病害虫の発生や気象障害などから等級は低く，水稲の専作経営が難しいことも田芋栽培の存続する理由に挙げられる．

水田農業は，灌漑と排水対策が必須な要件となり，斉一な基盤・規模と地域における受容体制があれば成り立つものである．金武町では田の基盤整備がほぼ終了し，灌漑，排水も十分になされ，田芋と水稲で安定的な水田農業が行われている．また農家の高齢化は必然的であり，過疎化で拍車のかかるものであるが，金武町は人口増加地域であり，高収益農業の確立で水田農業が維持されていると思われる．

表7．中央卸売市場における田芋の月別取扱量[1)]．

t

年度	項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
2003	取扱量	43.7	29.5	20.0	36.3	9.9	6.8	7.8	29.4	7.7	9.5	15.0	63.4	279.1
	沖縄産	36.2	25.2	14.1	28.2	7.1	5.2	2.7	10.2	2.1	2.3	10.2	50.9	194.4
2004	取扱量	38.1	36.7	25.7	38.9	10.5	6.4	10.3	29.2	7.1	9.7	13.2	60.2	285.8
	沖縄産	33.7	30.5	22.5	32.2	7.7	4.5	3.5	10.0	1.7	4.6	11.6	48.4	211.1
2005	取扱量	30.0	35.4	20.7	41.0	10.9	10.5	9.0	31.1	6.0	12.0	14.6	62.1	283.4
	沖縄産	28.6	33.3	17.4	34.6	9.6	6.9	3.3	12.4	2.6	6.6	12.6	54.1	221.9

1）沖縄県中央卸売市場：平成15，16，17年度市場年報

おわりに

金武町は田芋の一大産地であり，田芋栽培にとって条件整備の進んだ地域である．田芋と水稲の輪作体系は両者の安定生産につながり，水田農業を維持する要因にもなっている．田芋の栽培地である福花原や武田原は，かって湿田地帯であり，排水不良で浸水に悩まされていた．また牟田など深田（ユビ田）も多く，水稲作には大きな労苦をともなうものであった．排水対策や耕地整理，河川改修などは不良田を美田に変え，干ばつなどに左右されない安定した生産基盤が築かれていった．

しかし産地化に至る過程は紆余曲折を伴うものであった．1960年代から加州米の輸入増にともない価格は低迷し，水稲農家の激減で1975年頃には金武，並里から水稲が消失したという（金武町誌，1983）．同地に田を蘇らせ，価値あるものにしたのは田芋であった．田芋栽培は1976年以降から急増するが，栽培が軌道に乗るととも軟腐病など連作障害が発生し壊滅的な被害を被ることになった．当初1年間休耕やサトウキビ，カンショとの輪作も試みられたが，水稲との輪作体系で完全に防除することができた．

金武町は田芋と切り葉に特化した地域である．町内農産物の粗生産額は豚が最も多く，サトウキビ，鶏卵と続く．切り葉や田芋も上位に位置するが，両者の県内生産額に占める割合は高い．豊富な水利と基盤整備された沖積平野は，水稲の機械化や効率化を図るうえで最適条件が整備され，田芋との輪作体系で安定生産システムが確立され県内最大の田芋産地になった．宜野湾市大山は連作による芋腐敗が顕在化し，生産維持に陰りを落としている（外間，2006）．また水稲専作では経営が不安定であり所得向上も図れない．両者が補完的に，また効果的に役割を果たしてきたことで安定生産につながり，高収益を生みだしたことが田芋栽培の継続になったと思われる．

金武町の水田一筆面積は大きく，水稲作の機械化一貫作業体系が可能になったが，田芋は耕起以外ほとんど人力に頼らざるをえない．施肥や農薬散布は機械化できるが，植付けや収穫は手作業である．田芋は煮物出荷であり，日当たり処理量にも限界があることから手作業できる範囲が適当である．機械化と人力が適度に配分できることは高齢化時代の農業を行ううえで重要であり，田芋栽培にとって好都合である．

中央卸売市場における田芋取扱量の50％近くは12月から2月に集中する．そのほとんどは県産で占めるが，8月盆用は年間取扱量の11％程度であり，大部分がフィリピン産で賄われる．盆用の県産田芋価格は800円/kg以上に跳ね上がり，安定供給が求められていた．しかし金武町では水稲との輪作体系から盆用の供給が難しい．田芋を長期保存すれば盆用の供給体制ができる．しかし田芋は収穫後短期間で品質劣化をきたし，低温下でも1週間程度が限度である．金武町は田芋の低温貯蔵を試み，冷凍貯蔵（-20℃）することで長期保存できることを明らかにした（金武町，1995）．2004年度には貯蔵施設（12t容量）を整備し，生産者から1円/kg/日で依頼に応えている．施設利用は田芋の周年供給を可能とし，田芋栽培に弾みをつけると思われる．

金武町域の68％は米軍用地である．基地前には商業・サービス産業が立地し，かっては活況を呈していたが，現在低迷している．金武町は基地依存経済からの脱却を目指し1993年度に「特産品振興ビジョン」を策定した．田芋を核とした農業と加工，観光産業を繋いだ「田芋の里」づくりを提唱している．田芋の最大産地・宜野湾市は都市化による生産の後退を予想し，

金武町は水利，水田規模から一大産地を形成する素地をもっているとしている（金武町，1994 b）．2000年度の田芋生産量は宜野湾市を追い抜き，2002年度以降から県内最大産地となっている．田芋を地域特産品目として位置づけ，施策推進したことも生産振興につながったと思われる．

金武町は，古くから湧水や河川の豊富な水を利用した水稲作で安定した農業経営をなしてきた．沖縄の水田は，干ばつやサトウキビブームのなかで畑地転用を加速したが，排水不良地や河川流域は水田として残された．その後の圃場の基盤整備は，機械化作業体系を容易にし，良質米の生産に拍車がかかった．しかし過剰米や安価な外米輸入などは水稲専作を難しくしたが，田芋の登場は水田に活況をとり戻す原動力となった．水稲と田芋は，一方が欠けても存続し難い関係にあると思われる．両者が上手くかみ合って機能し，効果の発揮できるものである．同地における田芋生産は，水稲が存続し沖縄の伝統文化が消滅しない限り継続されると思われる．

引用文献

1）蝦名隆志．1993．沖縄本島における田芋栽培の動向．法政大学大学院紀要31：97-111.
2）橋本征治．2002．海を渡ったタロイモ．関西大学出版部.
3）外間数男．2006．田芋栽培の地域的展開5．宜野湾市の田芋栽培．沖縄農業40：27-39.
4）金武町誌編纂委員会．1983．金武町誌．金武町役場.
5）金武町役場経済課．1994 a．金武町の田芋料理．金武町役場.
6）金武町役場経済課．1994 b．金武町特産品振興（田芋）ビジョン．金武町役場.
7）金武町役場農林水産課．1995．マーケティング事業報告書－金武町田芋貯蔵及び技術改善.
8）金武区誌編集委員会．1994．金武区誌上巻．金武区事務所（金武町）.
9）並里区誌編纂委員会．1998．並里区誌－戦前編．並里区事務所（金武町）.
10）沖縄タイムス．1987．1987年5月2日朝刊
11）沖縄タイムス．1988．1988年2月18日朝刊
12）沖縄総合事務局名護統計情報出張所編集．1991．金武町の農業と漁業．沖縄農林水産統計情報協会.
13）沖縄総合事務局農林水産部．2006．第34次沖縄農林水産統計年報.
14）田里友哲．1992．沖縄の集落の形成．サンゴ礁地域研究グループ編「熱い心の島－サンゴ礁の風土誌」．古今書院：184-195.